

「人間の時代」の Wordsworth

風景と造園

小口 一郎

1. 序

18世紀から19世紀の西洋は、ビュフォン（Georges-Louis Leclerc, Comte de Buffon）が唱えた「人間の時代」を意識するようになった（Glacken 655-705）。「人間の時代」は、文明の発達により自然界に人間活動が入り込み、自然と人工との区別が困難になった時代である。この発表では、ウィリアム・ワーズワス（William Wordsworth）が「人間の時代」の意識を共有していたことを、彼の造園論と『湖水地方案内』（*A Guide to the District of the Lakes*）を題材に考える。なお、ビュフォンの概念は、現代の環境学が提起し、環境批評にも援用されている「人新世」（the Anthropocene）とも響き合い、現代的意義も有している。

2. 『湖水地方案内』と「人間の時代」

『湖水地方案内』の当初の執筆動機は「自然美の保全」であった（Wordsworth, *Prose Works* 2.327）。しかし特に1835年の最終版では、自然景観とならび人間活動が重要な焦点となっている。このことは、この書には「人間の時代」と同じ類の意識があり、「人新世」的な発想が秘められていたことを示唆する。また、ビュフォンと同様、ワーズワスは人間の介入の肯定的な面にも大いに目を向けていた。そこでは自然と人間は明確な対立をなさず、混じり合う総体をなしている。

3. 造園における人間と自然

ここで鍵となるのが造園である。庭園は限定された環境における自然の再現であり、自然と人間の境界があいまいになる場である。よって「人間の時代」に倣って『湖水地方案内』を、ワーズワスの造園経験から考えることは有意義であろう。実際、湖水地方における住まいであったダヴコテッジ（Dove Cottage）の庭、そして支援者サー・ジョージ・ボウモント（Sir George Beaumont）の地所の一角に造られた庭、これらの造園経験からワーズワスが得た考察は、『湖水地方案内』の風景論を支える思想的支柱となっているのだ。

ダヴコテッジの庭において、自然と人工の関係は2つの現れ方をしている。1つは開放と囲い込み（川崎 179-80）である。手紙の中でワーズワスは、庭の外の自然景観に目をやり、「ここから眺望が得られる」と喜ぶとともに、花壇のために「2、3ヤード囲い込もうと思う」とも述べている（*Letters, Early Years* 274-75）。2つめは野生と人工の共存である。外から持ち込んだ草花は、自生する植物と渾然一体と植えられ、遊歩道や石段なども地形や草木に溶け込むように造成された（Dale and Yen 28）。コテッジ自体も植物で覆われ、人為が自然に取り込まれた様相を呈している。

ダヴコテッジでの造園経験の後、ワーズワスはボウモントのコラートン（Coleorton）屋敷の一角にウィンターガーデンを造る機会を得た。この庭は、ジョウゼフ・アディソン（Joseph Addison）の庭園論を参考に、砂利採取場の跡地に設定され（Wordsworth, *Letters, Middle Years* 1.93）、自然の上に作られた人工物を人の手で再自然化するという複雑な構造を持つ。造園の構想を語る手紙からは、再自然化がこの庭の主たる原理であることがうかがえる。例えば「古い見苦しい壁」（1.113）と感じられる石垣を、「ツタやトキワサンザシ」（1.113）、そして「ヒイラギなどの常緑樹」（1.114）で覆うことが提案されている。敷地近くの古いコテッジもツタで美しく飾ろうとする。コテッジは、景色を美化する「主要な視覚的印象」や「中心テーマ」と定義され、風景の審美的焦点の役割も与えられた。こうした人為と自然の関係は、造園が一段落した後、「人の手が目立たぬように、自然の精神のままに」（*White Doe of Rylstone* 199）という原理にまとめられた。

庭の見せ方も、自然と人為の関係として重要である。「外周に沿って道をたどると、それまで見えなかった石段が眼前に現れます」という記述が表すように、主たる鑑賞方法は、散策の中で眼前に展開する景色を発見していくことである。しかしその一方で俯瞰の視座もあった。「今、新しく造られた壁の上のテラスに立っていると想像してみてください。もちろん見晴らしがよいでしょうから、そこから庭を見下ろしましょう。」（*Letters, Middle Years* 1.112）続いて庭の全体像が示唆され、散策の視座を補完することになる。

4. 庭としての自然

コラートンの経験は『湖水地方案内』の背景をなす。この書が記述する自然景観も、自然と人為の協働によ

って成立している場合が多いからだ。人為と自然はしばしば敵対もするが、その一方で人工物が風化などの自然作用によって調和的になることもある。そうした人と自然の関係を目にして、ワーズワスは自然への関与のあり方を、「可能な限り自然の精神をもって行うこと、人為の姿を見えなくすること」(*Prose Works* 211-12) とした。ここにコラートンで得た造園原理を読み取ることはたやすい。

庭が自然を美しく再現するように、『湖水地方案内』にも人為が自然を美化する例がある。中でもコテージが美的要素とされ(167, 179)、「風景の中心点」(215)として審美的に機能していることは、コラートン構想との重要な共通点である。また造園に植樹や剪定がともなうように、森林管理は風景の要素になる。『湖水地方案内』は、人間の関与が森林の保全と風景の美化につながった例を複数あげる。例えば、かつて修道院長たちは「小作農民に土地を分配」(198)し、きめ細かい土地管理と木々の保全を可能としたことで、「この地方の美と重要性はブリテン島の他の地域すべてに、はるかに優る」(198) ことになった。また、原生林の再生の努力は「谷を木々の装いで美化し」、「森の様相が高められる」(199) ことを可能にした。これらの営みは優れて造園的である。この書は、湖水地方を自然と人間が協働して造る巨大な庭園と見なしているようだ。

コラートンの構想と同様、『湖水地方案内』も読者を案内するルートを意識している。そこでは「2 つめのソーリー村から出ると、素晴らしいエスウェイト湖の眺望が得られ、遠方にはラングデイルパイクの山頂の1つが見える」(162) などと、審美的散策者の視点がとられる。さらに、散策的記述に先立ち、地域全体を鳥瞰しようとする視座も明言される。「・・・2つの山の間には浮かぶ雲を眺望の座としよう・・・すると足許には8は下らない数の谷筋が、今われわれがいるところから四方に広がるのが見える。」(171) 『湖水地方案内』とコラートン造園は、趣旨、視座、レトリックの点で一致する。

このように『湖水地方案内』は庭園的視点で自然を見ていた。そこでは自然と人為は協働し、時には分離し難い総体をなす。ビュフォンは、「今日の地表の全体に人間の力が刻印されている。人間の力は自然の力に従属するとはいえ、しばしば自然より多くの創造をなし、あるいは少なくとも自然を見事に助けた」(Buffon 124) と述べていたが、『湖水地方案内』もまた「人間の時代」を体現するテキストであったのだ。

5. 結語

だが、自然と人の協働は、時代とともに難しくなっていく。ワーズワスも晩年に、鉄道敷設計画への反対運動の中で自然破壊に深刻な懸念を表明した。19世紀後半のアメリカの思想家、ジョージ・パーキンス・マーシュ(George Perkins Marsh)は、18世紀のビュホンと同様、自然と人為の不可分性を認識している。しかし彼の眼差しは悲観的であり、文明は原初の自然のバランスを回復不能なほど破壊していると見た。そこから、自然と人間の再分離を目途とする環境保護を訴えるようになる。ワーズワスは意識せずして、このビュホンからマーシュへの流れの中にいたのかもしれない。自然と人間は共生から相克への様相を濃くしていく。

しかしそれでも人は、造園の中に自然を求めることをやめない。自然は実践の中に立ち現れ、人と自然は実践の中で折り合いがつけられる、と本能的に感じているのかもしれない。ビュフォンが考察し、ワーズワスが体感した自然と人との関係は、「人新世」認識した現代にこそ、もう一度見直されるべきではないだろうか。

引用文献

Buffon, Comte de (George-Louis Leclerc). *The Epochs of Nature*. Trans. and ed. Jan Zalasiewicz, Anne-sophie Milon, and Mateusz Zalasiewicz, U of Chicago P, 2018.

Dale, Peter, and Brandon C. Yen. *Wordsworth's Gardens and Flowers*. ACC Art Books, 2018.

Glacken, Clarence J. *Traces on the Rhodian Shore: Nature and Culture in Western Thought from Ancient Times to the End of the Eighteenth Century*. U of Chicago P, 1976.

川崎寿彦『楽園のイングランド—パラダイスのパラダイム』河出書房新社、1991.

Wordsworth, William. *The Prose Works of William Wordsworth*. Ed. W. J. B. Owen and Jane Worthington Smyser, Vol. 2, Clarendon Press, 1974.

—. *The White Doe of Rylstone: or The Fate of the Nortons*. Ed. Kristine Dugas, Cornell UP, 1988.

Wordsworth, William, and Dorothy Wordsworth. *The Letters of William and Dorothy Wordsworth, Second Edition I, The Early Years 1787-1805*. Ed. Ernest de Selincourt, rev. Chester L. Shaver, Clarendon Press, 1967.

—. *The Letters of William and Dorothy Wordsworth, Second Edition II, The Middle Years, Part I, 1806-1811*. Ed. Ernest de Selincourt, rev. Mary Moorman, Clarendon Press, 1969.

*本研究は JSPS 科研費 21H00512、および 19K00392 の助成を受けた。